

特別史跡

西都原古墳群

発掘調査・保存整備概要報告書(X)



宮崎県教育委員会

2006.3

本文目次

例言

第Ⅰ章 調査及び整備の経緯	1
第Ⅱ章 46号墳の調査	3
第Ⅲ章 111号墳の調査	6
第Ⅳ章 170号墳の調査	12

例　　言

- 1 本書は、文化庁の補助を受け、宮崎県教育委員会が平成15年度から19年度の5ヵ年に実施する「西都原古墳群歴史ロマン再生空間形成事業」の平成17年度の概要報告書である。
- 2 発掘調査は宮崎県教育委員会が事業主体となり、宮崎県立西都原考古博物館が実施し、保存整備工事は宮崎県都市公園総合事務所に分任し実施した。
- 3 施設設計・監理は、(株)文化財保存計画協会に委託した。
- 4 本書の執筆は、第Ⅰ～Ⅲ章を二宮満大が、第Ⅳ章を犬木努（大谷女子大学助教授、西都原170号墳調査協力）が行った。
- 5 調査および保存整備にあたっては、西都原古墳群保存整備指導委員会の委員や特別調査員の先生方に御指導をいただいた。また、西都市教育委員会には御協力をいただいた。記して感謝する。
- 6 調査で出土した遺物は、県立西都原考古博物館において保管している。

第Ⅰ章 調査及び整備の経緯

第1節 調査及び整備に至る経緯

大正元年～6年にかけて実施された、日本初の合同学術調査において、西都原古墳群では30基の古墳が調査されている。この調査は、総合的な視点での古墳調査ではなかったものの、出土遺物の質・量という観点からは、今だ学史に残る成果が得られている。この調査以後、西都原古墳群に対する保存意識の高まりは大きくなり、昭和9年の国史跡指定に始まり、昭和27年の特別史跡指定、そして、昭和41年～43年には全国第1号となる『風土記の丘』として整備された。

昭和41年～43年にかけて行われた『風土記の丘』整備事業の後、史跡保存を目的として、約30年の眠りについていたが、再び西都原古墳群を整備し、「保存」から「活用」へ視点を向けた整備計画を実施することとなった。

新たな整備事業では、平成5年度～6年度での「西都原古墳群保存整備検討委員会」の設置および「西都原古墳群保存整備活用に関する基本計画」の策定に始まり、平成7年度～9年度での「大規模遺跡総合整備事業（歴史ロマン再生事業）」、平成10年度～14年度での「地方拠点史跡等総合整備事業」において、測量調査、発掘調査、施設建設などを実施した。平成7年度～14年度の5ヵ年計画で実施された整備事業であるが、さらに平成15年度から5ヵ年計画による「西都原古墳群歴史ロマン再生空間形成事業」として、西都原古墳群の発掘調査、復元整備を継続して実施している。

また、平成16年4月には、古墳群全体をフィールドミュージアムとして捉えた「県立西都原考古博物館」がオープンし、古代日向を通して、広く国内外の歴史情報を発信している。

第2節 整備事業の経過

「西都原古墳群歴史ロマン再生空間形成事業」では、平成15年度に46号墳（前方後円墳）、111号墳（円墳）、169号墳（円墳）の発掘調査を実施し、寺原第2支群の環境整備、芝貼による169号墳の復元整備工事、4号地下式横穴墓（111号墳）の見学カメラの設置を行った。

平成16年度は、46号墳、111号墳の発掘調査を行い、新たに170号墳（円墳）の調査を開始した。さらに、169号墳の復元整備工事を引き続き実施し終了した。

本年度は、前年度に引き続き46号墳、111号墳、170号墳の発掘調査を実施した。111号墳、170号墳に関しては、本年度で調査を終了した。

平成7年度～14年度までの整備事業は、既刊行の概要報告書に詳しいので、そちらを参照されたい。



第1図 西都原古墳群全図及び発掘調査古墳位置図

第II章 46号墳の調査

第1節 古墳の立地

46号墳は、西部原台地の南東部に展開する第1古墳群のほぼ中央に位置する。周辺には、北に72号墳、東に56号墳、南に1号墳、13号墳、36号墳、西に202号墳の前方後円墳が分布する。

第2節 調査の概要

46号墳は、後円部を西に向けた、ほぼ東西に主軸を持つ前方後円墳である。

前年度までの調査の結果、墳丘規模は、全長約84m、後円部径約50m、前方部前面幅約35m、くびれ部幅約19mを測り、後円部3段、前方部3段により築造されることが確認できた。

葺石は、後円部・前方部とともに各段すべての斜面部で確認ができ、さらに、1段目根石列が2重にまわることが判明した。周溝は、1段根石列から約1.5mの位置に内肩がみられ、深さ約0.4mを測る。ただし、外肩は明瞭な立ち上がりを設けていない。

本年度は、南隅角と前年度調査の前方部トレンチの3段目根石列から墳頂部にかけての調査を実施した。

調査の結果、どの調査区とも葺石の保存状態は良好であった。しかし、南隅角トレンチにおいて、1段目側面の一部と3段目根石列は、流失していた。また、1段目根石列付近は、後世の攪乱が著しく、根石列は一部を残すのみであった。

周溝については、南隅角トレンチで確認を行った。1段目根石付近の攪乱により、明瞭な内肩は遺存こそしていなかったが、根石からトレンチ端の墳丘構築面までの約0.4mの比高差と前方部における前年度の調査結果から、南隅角にも周溝が存在したと考える。

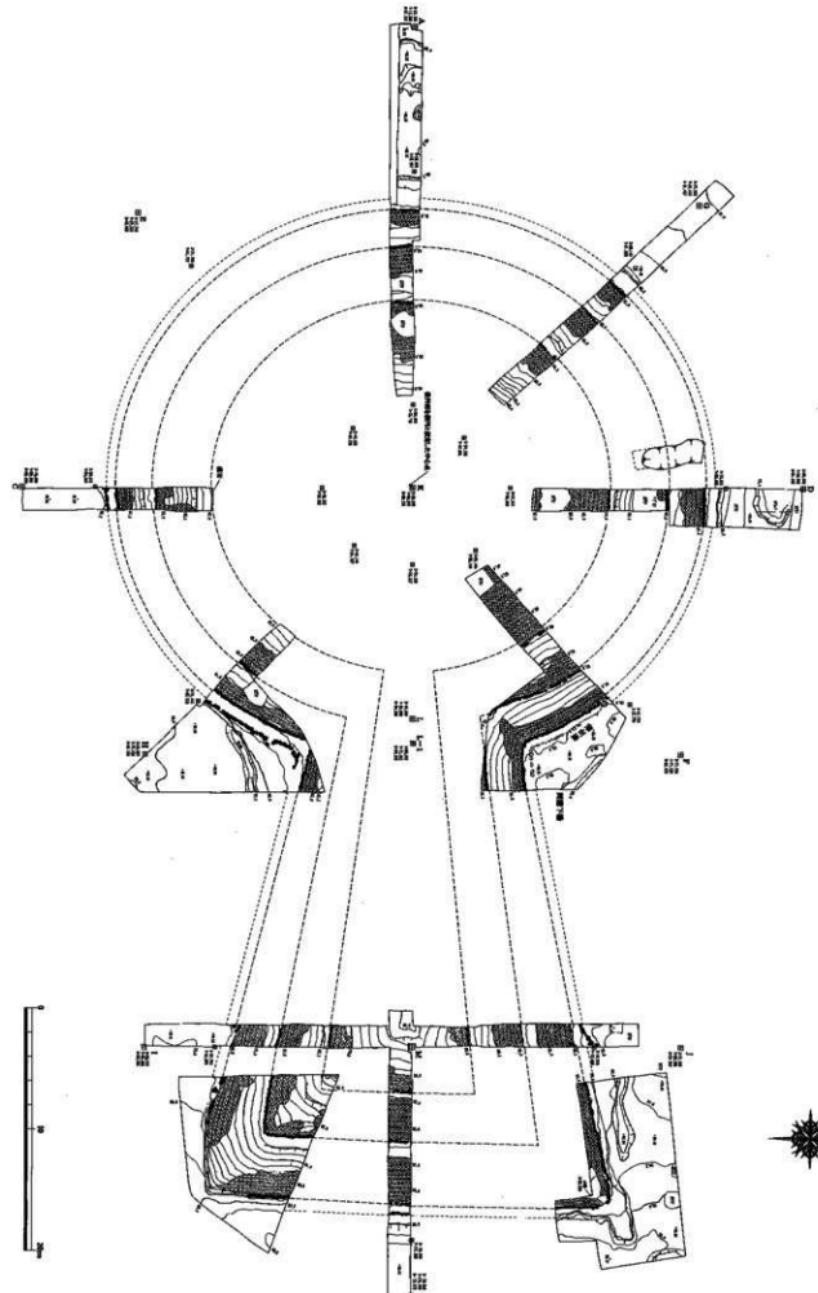
前方部の1段目根石列から墳頂平坦面までの高さは、前方部前端部分で約6mを測る。

遺物は、表土掘削中に土師器片が出土したが、時期を明確にするものはない。

第3節 小結

今回の調査では、前方部3段目根石列から墳頂平坦面までと南隅角を調査したことにより、前方部における墳丘規模がほぼ確定できた。これにより前方部3段の斜面比は、ほぼ1:1:1となることが確認できた。また、前方部前面は墳丘主軸に対して直角にならず、北隅角が少し東に傾く。前年度の調査で確認した北隅角の舌状の張り出し部の存在とも併せて、この部分を墳頂部への「道」と考えたい。

今後は、後円部の規模確定、前方部と後円部における接続の形状、さらに、埋葬部の確認などに重点をおいて調査を実施し、墳丘復元に向けたデータの充実を図りたい。



第2図 46号墳石残存状況及びトレンチ配置図 (S=1/400)



46号墳全景（南東から）



46号墳南側隅角周辺（東から）

第Ⅲ章 111号墳の調査

第1節 古墳の立地

111号墳は、西都原台地の北部に展開する第3古墳群の最南端に位置する円墳である。標高は現状で約65mを測る。111号墳には、南側周溝内に構築面をもつ地下式横穴墓（4号）が存在し、玄室内に玉類、鏡、直刀、鉄鎌、短甲などが副葬されていた。また、平成14年度には、地下式横穴墓の保存整備のために、再調査が実施されている。周辺には、無数の円墳が散在し、南西には陵墓参考地である男狹穗塚、女狹穗塚の両古墳が分布する。

第2節 調査の概要

前年度までの調査の結果、墳丘規模は、直径約29.5m、高さ約5.0mを測り、2段により築造される円墳であることが確認できた。

本年度は、墳丘全面の調査を実施した。また、前年度で報告した墳頂平坦面の2基の墓壙と新たに検出した2基について半裁による確認調査を行った。これらについては、現段階すべてが埋葬部と判断ができないため、ここではすべて土坑と呼称する。

墳丘1段目は、全周にわたって、かなり削平を受けていることが判明したが、南斜面部で若干遺存する場所もある。

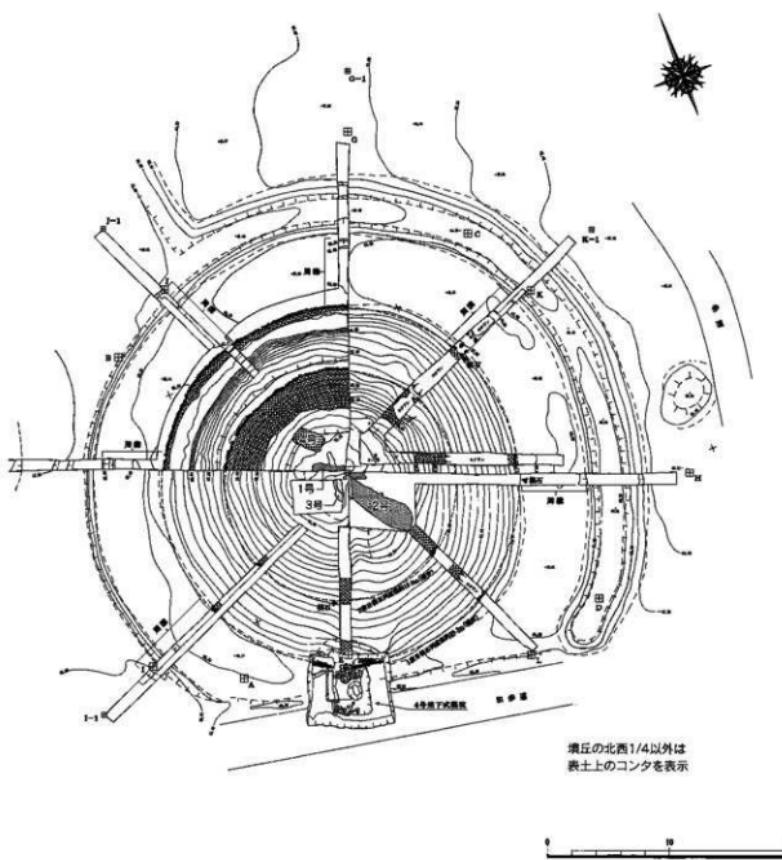
墳頂平坦面では、4基の土坑を確認し、すべてについて半裁による調査を実施した。

墳頂中央に位置し、ほぼ東一西に主軸をもつ1号土坑は、木棺直葬で、棺外の頭部側で須恵器壺と土師器鉢、棺内では玉類と挂甲（足部側）が原位置で出土した。墳頂南東部に位置し、南東一北西に主軸をもつ2号土坑にも、木棺が直葬されていたと考えられる。埋土内から鉄製鐵、金銅製品の破片、ガラス小玉が出土した。墳頂中央に位置し、ほぼ南一北に主軸をもつ3号土坑では、木棺の痕跡は確認できなかった。埋土内から鉄製鐵などが出土した。これらの土坑は、1号→2号→3号の順で切り合った関係をもつ。墳頂北西部に位置し、南東一北西に主軸をもつ4号土坑は、樹木による攢乱坑の可能性が高い。埋土内から土師器片、玉類、鉄器片が出土した。

また、2号土坑を掘り下げる途中、床が陥没したことで墳丘内に空洞部を発見した。墳丘2段目斜面から墳丘内部に向かって斜めに掘削されている。入口を塞ぐ埋土から、ビニール等が発見された。

第3節 小結

今回の調査では、墳丘の全面にわたって1段目が大きく削平されていたこと、墳頂平坦面に4基の土坑が存在し、うち1・2号土坑については、確実に埋葬主体部であることが確認できた。最も古い1号土坑の時期は、出土遺物から6世紀初頭と考えられる。また、4号地下式横穴墓の構築は、出土遺物より5世紀末に比定されるため、111号墳は、4号地下式横穴墓の墳丘として築かれた可能性が高い。



第3図 111号墳蓋石残存状況及び墳頂平坦面透構図 (S=1/400)
(蓋石残存状況は平成16年度調査分)



111号墳全景（西から）



111号墳1号土坑検出状況（北東から）



111号墳1号土坑土器出土状況（西から）



111号墳1号土坑挂甲出土状況（東から）

第IV章 170号墳の調査

第1節 古墳の立地

170号墳は、西都原台地の西側に位置する円墳で、「雜掌塚」と称される。標高は現状で82~83mを測る。周辺には、北に169号墳、東に男狹穂塚、女狹穂塚の2基の陵墓参考地、南に西都原古墳群唯一の方墳である171号墳が分布する。また、170号墳は169号墳とともに、男狹穂塚古墳の陪塚とされる。

第2節 調査の概要

本年度の調査では、トレントを墳丘の南西部に7本と南東部にわずかに認められる突出部に1本を設定したほか、前年度に墳丘南西部に設定したトレントの墳丘外への延長、さらに、墳頂部中央で確認した大正時代の調査坑の再調査を実施した。

墳丘南西部の延長トレントで、周溝の一部を検出した。周溝の上端幅約8m、下端幅約5m、深さ約1.0m(現地表からの深さ約1.6m)である。周溝内からは埴輪片が出土せず、墳丘第1段目平坦面および周溝外周には円筒埴輪が樹立されていなかったものと思われる。墳丘規模も従来の推定より若干大きくなる可能性がある。

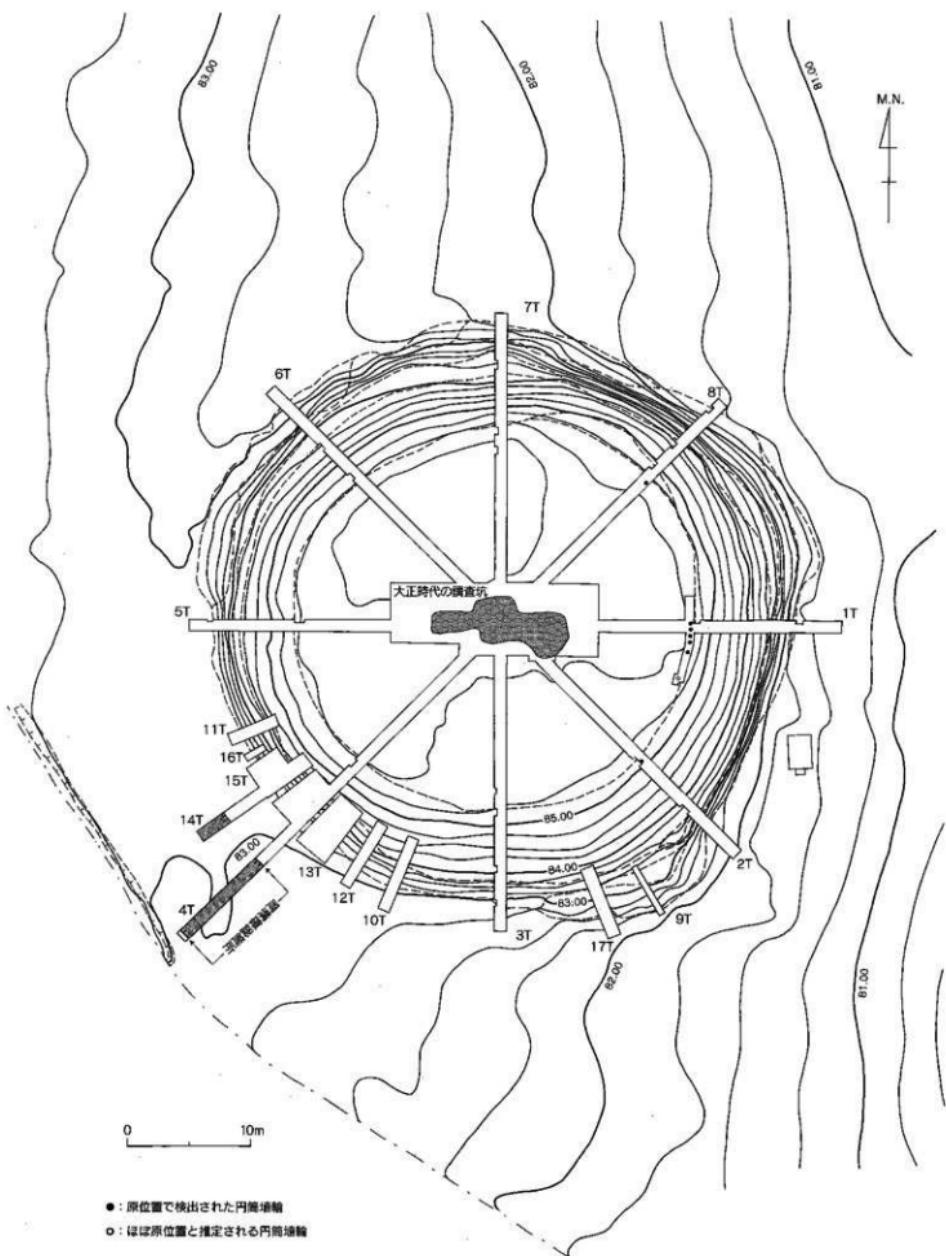
墳丘南西部の7本のトレントでは、墳丘の検出作業を行った。この結果、墳丘盛土直下のアカホヤ層が、幅約6mにわたって切れる部分を確認した。墳丘を盛る前に、この部分のみアカホヤ層の下まで深く削り込んでいる状況を示しており、墳丘築造に伴う作業工程を示す可能性がある。

また、突出部のトレント調査の結果、「突出部」状の平坦部は、墳丘第2段目のテラスが遺存したものであることが判明した。

大正時代調査坑の再調査では、調査坑内部に調査終了後の埋土が充填されていただけで、埋葬施設自体の痕跡は確認できなかった。埋土内から船形埴輪や子持家形埴輪の小破片が出土した。これらは、現在重要文化財に指定されている船形埴輪や子持家形埴輪の一部と思われる。また、三角板革縫短甲の地板の破片が数点出土した。

第3節 小結

今回の調査では、埋葬施設自体の痕跡は削平のため検出できなかったものの、西都原古墳群出土として重要文化財に指定されている船形埴輪と子持家形埴輪の破片が出土し、両埴輪の出土古墳を初めて確定することができた。また、周溝をもつ3段築成の古墳であることが確認されたことにより、従来、低平な墳丘をもつ点ばかりが強調されてきた170号墳のイメージを再検討する必要がある。



第3図 170号墳トレンチ配置図及び造構図 (S=1/400)



170号墳全景（上が北）



170号墳大正時代調査坑完掘状況（東から）



170号墳トレンチ13完掘状況（南西から）



170号墳周溝検出状況（北から）

報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきさいとばるこふんぐん ほっくつちょうさ・ほぞんせいひがいようほうこくしょ
書名	特別史跡西都原古墳群
副書名	発掘調査・保存整備概要報告書
巻次	X
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	二宮満夫
発行機関	宮崎県教育委員会
所在地	〒880-0805 宮崎市橘通東1丁目9番10号
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
さいとばるこふんぐん 西都原古墳群	さいとしおおあがみやけ 西都市大字三宅	45208				2004.8 ↓ 2005.3		

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古墳	古墳	46号墳 草石 111号墳 墓壙、葺石 170号墳 大正時代調査坑、周溝	土師器 須恵器、土師器、玉類、 鉄製品(挂甲、鐵)、 金銅製品 形象埴輪(舟形、家形)、 鉄製短甲破片	墳頂平坦面に6世紀 初頭以降の墓壙 周溝を持つ3段築成 の円墳と確定

2006年3月

特別史跡

西都原古墳群

発掘調査・保存整備概要報告書（X）

発行 宮崎県教育委員会

編集 宮崎県立西都原考古博物館
